

仏教とタイの人々

仏教とタイの人々



セーン・チャンガーム

セーン・チャンガーム
チェンマイ大学名誉教授

仏教とタイの人々

セーン・チャンガーム

チェンマイ大学名誉教授

©1999 Saeng Chandra-ngarm

All rights reserved

Printed at Ming Muang Printing Press, Chiang Mai

No part of this book let may be used or reproduced in any manner whatsoever without written permission.

For more information, address Prof. Saeng Chandra-ngarm

Mahamakut Buddhist University: Lan Na Campus

103 Phra Pokklao Road, Amphoe Muang

Chiang Mai 50200, Thailand

はしがき

私は、この数年の間、外国人の旅行グループに、仏教についての講義をしてきました。たいていのグループが、平均 1時間の仏教についての講義でしたが、それは仏教のような広大なテーマには、非常に短い時間でした。そのために、聴衆が最も良く知りたいテーマを見つけ出す必要がありました。

何年もの試みの後、私はこの小冊子で提示する望ましい解決方式を見つけました。その解決方法は3つの主な部分から成り立っています。

1. タイの仏教の一般的な情勢
2. 仏教の3の基本的な原則
3. タイの人々への仏教の影響

この小冊子は、仏教についての講義のアウトラインとして、また、仏教とタイの人々をより一層知りたい人々が家に持ち帰る記念品として、書かれました。

この小冊子を世に出すにあたって、ソンマイ・プレムチット助教授の貴重なご支援をいただいたこと、また、三上于志男君が日本語訳を担当してくれたことについて、感謝の意を表します。

チェンマイ 1999 年 10 月

チェンマイ大学名誉教授 セーン・チャンガーム

目次

| | |
|--------------------|----|
| 仏教とタイの人々 | 1 |
| 仏教の5つの層 | 2 |
| 仏教の5つの局面 | 2 |
| 1. 覚りとしての仏教 | 3 |
| 2. 人生の哲学としての仏教 | 4 |
| 3. 道徳としての仏教 | 6 |
| 業の法則 | 6 |
| 業の質 | 8 |
| 対となる人々の義務 | 8 |
| 妻に対する夫の5つのすべきこと | 9 |
| 子供たちに対する親の5つのすべきこと | 10 |
| 仏教での理想的な社会 | 10 |
| 4. 民間宗教としての仏教 | 11 |
| 5. 国家制度としての仏教 | 12 |
| タイの仏教の4つの味方 | 12 |
| 1. 比丘の僧伽 | 12 |
| A. 出家の動機 | 13 |
| B. 比丘のつとめ | 14 |
| C. 比丘の日課 | 15 |
| D. 比丘の行政組織 | 16 |

| | |
|-----------------------------|-----------|
| E .地域共同体の中でのワットの役割 | 16 |
| 2 .君主国家と仏教 | 17 |
| 国王の宗教的な役割 | 18 |
| 3 .政府と仏教 | 19 |
| 6 .信者と仏教 | 19 |
| 信者は次の方法で僧伽を支援します | 20 |
| タイの一般の仏教徒は何を信じていますか | 22 |
| 仏教の教えによって形づくられるタイの特色 | 23 |
| 上座部部教と大乘仏教の相違点 | 27 |
| 仏陀は誰であるか？ | 32 |
| 転機 | 33 |
| 覚り | 35 |
| 仏陀の伝道 | 36 |

仏教とタイの人々

タイの仏教は、スリランカやミャンマー、ラオス、カンボジアで信奉されている上座部仏教、すなわち南伝仏教に属します。

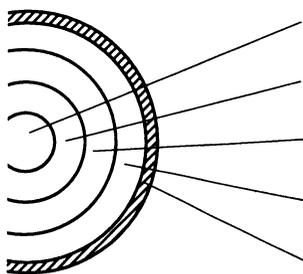
上座部仏教は、ゴータマ仏陀を崇拝して、パーリ仏蔵の教えを伝えています。経典の新しい解釈を認めないので、どちらかと言うと保守的であり、正統派です。その思想には強い統一性があり、大きな違いはありません。

仏教は次の理由のためにタイの国家の宗教と見なされます。

1. 6千万人のタイ人のおよそ92パーセントが仏教徒です（イスラム教6%、キリスト教1%、他の宗教1%）。
2. 君主は国家の憲法八条によって仏教徒でなければなりません。
3. 仏教は、千年以上にわたって、タイの人々の生活の哲学であり、タイの人々の性格や心、生活様式に大きな影響力を与えています。
4. 仏教はタイの文化と文明の基礎であり、文学や彫刻、建築、芸術、劇、歌、音楽に創造的な影響を与えています。

仏教の5つの層

現在のタイの仏教は、この25世紀の間に、徐々に発展してきました。それはまるで、木の年輪のように、中央の核と周りの年輪から成り立っているように見えます。



覚りとしての仏教

人生の哲学としての仏教

道徳としての仏教

民間宗教としての仏教

国家制度としての仏教

仏教の5つの様相

| | 層 | 規模 | 目標 | 仏教徒のタイプ |
|----|----|-----|-------|---------|
| 1. | 覚り | 経験的 | 本当の幸福 | 瞑想的 |
| 2. | 哲学 | 知的 | 知識 | 知的 |
| 3. | 道徳 | 社会的 | 幸福と社会 | 道徳家 |
| 4. | 民衆 | 感情的 | 安全 | 一般の仏教徒 |
| 5. | 国家 | 政治的 | 国家安全 | 民族主義者 |

1. 覚りとしての仏教

覚りは仏教の最も崇高な目標です。覚りには、次の4つのすぐれた特質 (仏徳) があります。

1. **智慧** (pañña)。すべての現象、特に我々の生の背後に隠れている3つの基本的な真理 (三相) についての優れた智慧。

1.1. **苦** (Dukkha) の真理。生は不完全であり、不完全は不安であり、苦です。

1.2. **無常** (Anicca) の真理。生は、刹那刹那に変化しています。

1.3. **無我** (Anatta) の真理。生は、私は「あるいは私の」と関係ない要因によって、時間と宇宙の中を漂っています。

2. **清浄** (Visuddhi)。すべての煩惱が、智慧によってなくなることによって得られる心の完全な清浄。主な煩惱は、むさぼること (貪欲)、いかり (瞋恚)、仏教の教えを知らないこと (愚癡) です。

3. **寂靜** (santi)。煩惱がないときの、心の完全な平穩。仏教では、心の平穩が本当の幸福であると考えます。

4. **大悲** (karuṇā)。覚りを得た人が苦海でもがいている他の生き物を見ると、大悲が生じます。悲は、他の生き物を傷つけることを避け、他の生き物を助けようとする強い動機となります。

2. 人生の哲学としての仏教

仏教の哲学は、ここでは、仏教の根本教理を意味します。それは「四諦」と呼ばれる4つの基本的な真理です。

1. **苦諦**。生は不完全であり、いむべきものであり、苦の過程です。この真理は、理解されるべきものです。

2. **集諦** (Samudaya)。苦の原因は、いたるところで快楽をもとめてやまない3つの渴愛 (三愛) に見いだすことができます。

2.1. 感覚的な快楽 (形式、音、におい、好み、接触) を追い求める欲愛 (Kamataṇṇa)。生きているものは、快楽を探し創造しようと求めてやみません。

2.2. 望ましいものを求める有愛 (Bhavataṇṇa)。生きているものは、望ましいものを求めてやみません。

2.3. 望ましくないものを否定しようとする無有愛 (Vibhavataṇṇa)。生きているものは、望ましくないものを破壊しようと求めてやみません。

すべての生きているものの活動は、創造し、維持し、破壊しようとすることに要約されます。この三愛は、それらすべての活動を支える力です。欲望は智慧によって破壊されます。

3. **滅諦** (Nirodha)。涅槃の境地です。死の後、完全に清浄となった心は、「涅槃」と呼ばれる「完璧な、不死の状態」と溶け合います。その本質は、人間の経験を越えているから、言葉で言い表せません。滅諦は経験されるべきものです。

4.道諦 (magga) も、みずから進んで苦行することと、感覚的な快樂で自己の欲求を満足させることの中道です。それは次の8つの方法 (八正道) から成り立ちます。

- 4.1. 正見 (正しい見解) すなわち生に対する正しい理解。苦の真理への明確な智慧。
- 4.2. 正思惟 (正しい思惟) は、苦や苦の生起を終わらせます。
- 4.3. 正語 (正しい言葉) には、偽りや中傷、耳障りな言葉、戯言がありません。
- 4.4. 正業 (正しい行い) には、損害を受けたり、他のものを不幸にすることがありません。
- 4.5. 正命 (正しい生活) には、他の生き物を害したり、飽くなき欲求がありません。
- 4.6. 正精進 (正しい努力) は、あらゆる種類の煩惱から心を守ります。
- 4.7. 正念 (正しい心の落ち着き) は、身体、心の状態、活動のすべてにわたって、絶え間ない自覚を發展させます。
- 4.8. 正定 (正しい精神統一) は、心がひとつに集中し、清浄になり、穏やかになり、透き通るまで、注意深く自分の心をひとつに集中しようとします。

このようによく集中した心は、出る息と入る息のような常に変化するものをじっと見つめます。そのとき、最高の智慧が、すべての煩惱を追い出して輝き、禅定者は覺りを達成するでしょう。八正道は發展させられるべきものです。

3. 道徳としての仏教

このレベルにおいての仏教は、個人あるいは社会全体の幸福を導くよい行為と、不幸に導く良くない行為を論じます。それは人間社会における人々の義務を定めます。また、理想的な社会の状況を示します。仏教の道徳の基礎は業の法則です。

業の法則

業の法則は、生きているものが生きている過程で働く因果の法則です。それは4つの要素から成り立ちます。

1. **煩惱**。すなわち人間同士や男女間から生じる衝動。その煩惱は、その特質によって2つの種類に分けられます。

1.1. 不善業 (Akusala)、欺き、どん欲、怒り等。

1.2. 善業 (Kusala)、賢明さ、寛容、同情等。

2. **思**。すなわち意思には2つの特徴があります。していることに対する十分な自覚と、明確な意図。

3. **行為**。業それ自身は次の3つのうちのひとつ、ふたつ、あるいは、すべてを通して実行されます。身 (身体的行動)、口 (言語的表現)、意 (意思)。これを身口意の三業と言います。

行動を決断した後に、業のエネルギーの量が構成されて、行う人の心に蓄えられます。蓄えられた業のエネルギーは次の方法で作用します。

- 3.1. それは行った人に同じような行為を繰り返すよう足します。行為が繰り返されると、それがその人の生まれつきの特徴になるまで、業のエネルギーが増えます。
 - 3.2. **業のエネルギー**は生のプロセスを維持する肝要な力です。転生を可能にする、主な要素です。物質のエネルギーが物質としての肉体を守ろうとするのと同じように、それは働きます。
 - 3.3. **業のエネルギー**は、現世と来世の生で、人の状態を決定する創造的な力です。
4. **業報**。すなわち業のエネルギーによって受けられた結果。業の結果は、3つの領域においてあらわれます。
- 4.1. 心あるいは情緒の領域で、良い行為を行えば良い気持ちに、悪い行為を行えば悪い気持ちになるでしょう
 - 4.2. 身体の領域で、行った人の身体の状態は (心身症的な) 心の状態に従って、結局は変化するでしょう
 - 4.3. 社会的な領域で、行った人は社会から、自分が行ったにふさわしい反応にあうでしょう。普通、良い行動は利益、地位、称賛、幸福をもたらします、一方良くない行動は、それらと正反対の結果をもたらします。

業の質

業は、善業、不善業、善でも悪でもない無記業に分類することができます。業の質を決定するために、業の4つの要素（煩惱、意思、行為、業報）が、業の質を決める判断基準として用いられます。

もしすべての4つの要素が良いなら、100%良い行為です。

もし3つの要因が良いなら、75%良い行為です。

もし2つの要因が良いなら、50%良い行為です。

もしひとつの要因が良いなら、25%良い行為です。

もしひとつの要因も良くないなら、0%良い行為です。

業の4つの要素について、意志が他の3より多くのウエイトをしめています。

もし、煩惱と意志が良くも悪くもないなら、行為はニュートラルです。行為それ自身は、食べて、飲んで、歩いて、眠るような習慣的なものです。

覺りの力が、業のエネルギーを無力化して、業を無力にすることができます。

対になる人々の義務

仏陀は、シンガーラ (Singala) という名の若者への説法で、6対に社会の人々を分けました。

親 対 子供たち

| | | |
|------|---|------|
| 教師 | 対 | 生徒 |
| 夫 | 対 | 妻 |
| 友人たち | 対 | 友人たち |
| 隠とん者 | 対 | 信者 |
| 主人 | 対 | 使用人 |

そしてひとつの側が他の側に働くべき5つのすべきことを決めました。
例えば、次の、生徒に対する教師の5つのすべきことを見てください。

1. 生徒を公正に導くこと。
2. 生徒が彼らだけで学ぶのを手伝うこと。
3. 教師の知識を十分に生徒に伝えること。
4. 友人たちの間で誉めて、生徒に興味を起こさせること。
5. 各方面で生徒を守ること。

妻に対する夫の5つのすべきこと

1. 妻を重んじること。
2. 妻を軽蔑しないこと。
3. 姦通を犯さないこと。
4. 家において妻に主権を与えること。
5. 妻に貴重な贈り物を時折与えること。

子供たちに対する親の5つのすべきこと

1. 子供たちが悪をすることを妨げること。
2. 子供たちに美德を仕込むこと。
3. 科学と技能について子供たちを教育すること。
4. 適当な配偶者を子供たちに与えること。
5. 時が来れば子供たちに遺産を与えること。

他の対のすべきことについては、シンガーローヴァーダ・スツタンタ (Singalovada Suttanta D. 189-192; 南伝 8 237) を参照してください。

仏教での理想的な社会

仏教の道德に関する教えでは、理想的な社会として、次の6つの特徴を示しています。

1. すべての目に見える環境が素晴らしいです。
2. すべての聞こえる環境が素晴らしいです。
3. すべてのメンバーが良い教育を受けています。
4. すべてのメンバーが良い収入を得ています。
5. すべてのメンバーが公共サービスを利用することができ、なおかつ十分です。

6. すべてのメンバーが適切なイデオロギーで教育されています。

4. 民間宗教としての仏教

仏教は非常に寛大な宗教です。仏教が伝播したところはどこでも、その地方の非仏教徒の要素と混じりました。仏教は、仏教自身に他の宗教の信仰と実践を同化させました。民間信仰としての仏教は、次の特徴が見られます。

- 4.1. 経典の文字通りの解釈を信じます。
- 4.2. 仏像を生きている人物のように崇拜し、仏像を生きているように扱います。
- 4.3. ヒズー教やローカルな宗教、アニミズム、他のことから超自然の生き物を仏教の中に取り入れて、仏像とともにそれらを崇拜します。
- 4.4. その主な礼拝は、ある特定の時と場所で行われる儀式と式典でなっています。

タイの多くの人々は民間宗教としての仏教に属します。普通の人々に人気があり、有意義であるのはこの仏教です。

5. 国家制度としての仏教

タイの人々によって非常に尊敬されるタイの人々のための3つの神聖な団体があります。

5.1. 国王

5.2. タイの民族

5.3. 仏教 (あるいは宗教)

これらの3つの神聖な団体は国旗で3つの色によって象徴されます。



赤色はタイ国民を表わします。

白色は宗教を表わします。

青色は国王を表わします。

仏教は、フランスのルイ14世国王の治世に、西洋の帝国主義の政治的な道具として、この地に来たキリスト教に対する盾として、アユタヤ時代(17世紀)に崇拝すべき神聖なものと定められました。

タイの仏教の4つの味方

タイには、仏教の安定を維持する4つの味方があります。仏教徒の比丘、国王、政府、仏教徒の在家信者です。

1.比丘の教団 (僧伽)

僧伽はタイの神聖な、精神的な施設です。王国におよそ3万の寺と5千のサムナック・ソン (すでに許可は得ているが、まだ寺院建設用地を国王から下賜されていない寺) があります。およそ30万人の比丘と沙彌が寺に止住しています。

さらに、比丘と沙彌のほかに、およそ1万人のメーチー (比丘尼ではなく、八戒を保つ女性出家者) が、寺の近くの宿舎やサムナックチー (メーチーの住むところ) に止住しています。

A.出家の動機

出家と還俗が非常に簡単であるために、多くの比丘がいます。出家する動機には主なもので6つあります。

- 1) 覺りを得る八正道を熱心に一生実践しようとするため。
- 2) 田舎からの貧しい子供たちが高等教育を受けるため。貧乏な少年が寺院のカリキユラムを通して、大学教育に苦勞してあがることができます。
- 3) 短期間、仏教を修行する、2週間から3ヶ月の間仏教を実践するため。比丘だった人は人間ができていて、家族生活を送る準備ができていると信じられます。

- 4) 出家によって得られる功德を両親に送るため、特に比丘になることができない母親のために。
- 5) 短い一定の時期、仏教を維持するのを手伝うため。僧衣それ自身が仏教のシンボルあるいはサインである信じられます。
- 6) それ以外の非仏教徒の理由。たとえば生活のため、以前の誓約を果たすため、研究や興味から。

B.比丘のつとめ

1.宗教的なつとめ

- 1.1 仏教、パーリ語言語 (上座部仏教の神聖な言語)と若干の世俗の科目を勉強すること。僧伽はそれ自身のカリキュラムを持っています。
- 1.2 仏陀によって制定された227戒を守ること。
- 1.3 禅定を実践すること。

生活の3つの真実 (苦、無常、無我)の智慧を身につけること。

2.世俗的なつとめ

- 2.1 人々に仏教の哲学と道徳を教えること。
- 2.2 種々の機会を通して、人々を宗教的な儀式に導くこと。

2.3 田舎の発展を手伝うこと。

2.4 在家信者の相談を受けること。

C.比丘の日課

- 午前 05.00 起床、禅定、個人的な勉強。
 06.30 托鉢。
 08.30 最初の食事。
 09.00 本堂で朝の読経。
 09.45 仏教研究の朝のクラス
 11.30 最後の食事。
 12.00 休養と個人の雑用。
- 午後 01.30 パール語や他の科目の午後の授業。
 04.00 清掃、自分の房舎の掃除。
 05.00 ゲストの時間、個人の雑用、あるいは訪問。
 07.00 晩の読経。
 08.00 私的な勉強あるいは雑用あるいは社会の集会。
 10.00 禅定と就寝。

比丘の日課は、時間、場所、状況あわせて柔軟に、多種多様に変化します。

D.比丘の行政組織

比丘の行政組織は、階層の頂点には僧王 (Sangharaja) を戴き、中央集権化され、十分に組織されています。

僧王は大長老会で推薦を受けて、王によって任命されます。僧王は生活のオフィスを持ちます。彼は国の宗教上のリーダーです。

僧王の下に、国の上級の有能な比丘から成り立っている大長老会があります。大長老会は国のすべての宗教的な活動を監督します。

大長老会の下に、各地の僧伽の責任者から共同体の寺の住職に至るまでの上級の比丘の階層があります。地域の長老としては80歳まで、村の寺の住職としては一生涯その地位にいます。

E.共同体の中でのワットの役割

すべての村に寺があり、寺と上住する比丘はいろいろな意味で村に貢献します。

1. 子供たちと比丘の学校として。
2. 薬草と伝統的な治療を専門に扱っている医療センターとして。
3. 公共の活動のために公共のセンターとして。
4. 子供たち遊び場として。
5. 共同体の博物館として。
6. 季節毎の催し物の開催場所として。

7. 公共で使用するのための用具の保管場所として。
8. 村人の中で対立と論争を解決するための法廷として (住職を仲裁人として)。
9. 旅行者のためのゲストハウスとして。
10. 貧しい人たちや見込みがない人たちの最後の避難所として。
11. 礼拝の場所として。

今日、寺の機能の多くが国家によって引き継がれました。しかし、田舎では、それらの寺の役割はまだ失われていません。

2. 君主国家と仏教

仏教の歴史で、君主国家は、仏教の繁栄あるいは仏教の衰えに関して重要な要素でした。信心深い仏教徒の国王が仏教を栄えさせ、非仏教徒の敵対的な国王が常に仏教を衰えさせました。

この千年の間、信心深い仏教徒の国王が続いているという点で、タイは幸運です。

君主国家は、常にタイの人々の心に特別な位置を占めています。

スコータイ時代 (A.D.1257-1378) 国王は、第一で国の最も重要な国民の父と見なされました。アユタヤ時代 (A.D.1349-1767) 国王はヴィシユヌ神 (世界を保護するヒズーの神) の権化と見なされました。

バンコク時代 (A.D.1782-現在) 初期の国王たちは菩薩 (未来の仏陀) と見なされました。

国王の宗教的な役割

国王は、仏教の安定性のために、仏教徒として非常に活動的でした。それは、国民と王位の安定性を意味します。

1. 国王と皇太子は通常一定の時期比丘として出家します (現在の王と皇太子はそれぞれ2週間比丘であった)。
2. 国王は、毎年、選ばれた多くの比丘に支援を与えます。
3. 国王は宗教的な教育と比丘の修行を奨励します。
4. 国王は毎年彼の誕生日に上級の比丘に栄誉ある地位を与えます。
5. 国王は若干の寺を王立寺として、後援を与えます。
6. 国王はカティン (Kathin) 儀式などの、季節毎の王室の行事を行います。
7. 国王は、宗教的な問題に関して上級の比丘に尋ねることで、仏教の研究を奨励します。
8. 国王は、重要な宗教的な仕事で、僧伽との協力関係を持っています。
9. 国王は彼の私的な寺院で禅定を習い、実践します。

3. 政府と仏教

憲法によって、政府は、王国で仏教と他の宗教を守り 支援することを義務づけられています。政府は通常文部省下の宗教局 (DRA)を通して宗教的なことがらを扱います。宗教局は仏教のために、次の方法で働きます。

- 1) 宗教局の局長は大長老会の秘書として働きます。
- 2) 宗教に関するすべての法令と法律を実施します。
- 3) 僧伽のための年度予算の割当を運営します。
- 4) 寺院の財産を経営します。
- 5) 宗教的な行事で国王に働きます。
- 6) 国立学校での道徳教育を指導 監督します。
- 7) 僧伽の運営にあたって、僧伽に協力します。

4. 信者と仏教

在家の仏教徒は、仏教を支援し、安定させるための、最も大きく重要なグループです。彼らは、非公式の教育と公式の教育によって仏教の知識を得ます。

A. **公式の教育。** 初等学校 (6年)レベルと中等学校 (6年)レベル。

- 1) 仏教は、仏教徒の全学生の必修科目です。週 1時間が仏教に割り当てられます。

- 2) 多くの大学で仏教は選択科目です。
- 3) いくつかの寺院がキリスト教の真似をして、日曜日に、共同体の子供たちに仏教を教えるために日曜学校を開いています。
- 4) 幼稚園で、子供たちは仏教徒の道徳と文化を教え込まれます。
- 5) 仏教の儀式が季節的に、また、時折、学校で行われます。

B. 非公式の教育は、次の方法で行われます。

1. 仏教的な道徳的なアドバイスが、彼らの両親や祖父母によって若者に与えられます。
2. 仏教の儀式が家で、あるいは共同体で、時折行われます。そこで、その仏教の教えが間接的に教え込まれます。
3. ラジオやテレビを通じて、正規の仏教の番組が、私的な組織と同様に国家によって提供されます。
4. 信者が尊敬されている比丘を地方の寺に訪問して、比丘との会話で仏教の教えについて学びます。
5. 仏教の哲学的発言に満ちている雑誌、小説、詩歌などを読むことで、学びます。

信者は次の方法で僧伽を支援します。

- 1) 規則的に、あるいは時折、朝、托鉢中の比丘に食物を布施します。

- 2) 本尊を拜んだり お布施をしたり 比丘から宗教的な指導を受けたり 占い師の比丘と相談したりするために、時折寺院に参拝します。
- 3) 経典をあげたり 五戒あるいは八斎戒を保ったり 比丘に食物を与えることによって功德を積んだり 説教を聞いたり 禅定をしたり 布薩の日 (陰暦によると月に4日) 地方の寺に詣でます。
- 4) 比丘に資具を与え、誕生日、結婚式、新年、家の新築、新しいビジネスのオープニング、宗教に関する休日のような重要な時に、比丘から祝福を受け取ることによって功德を積みます。
- 5) 家族の男性を、一定の期間、一週間なり3ヶ月なり出家させ、仏弟子としての教育を受けさせ、その功德を両親に送り 仏教の保護者としてつかえます。

在家の仏教徒は、毎日の生活で、宗教的な行事を次のように行います。

- 1) 家の仏壇の前で、1日2度 (朝と晩) 三宝 (仏、法、僧) に敬意を払う儀式を行います。
- 2) 朝、比丘に食物を布施します。
- 3) 仏教の布薩の日々に寺院に詣でます。
- 4) 五戒 (不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒) を守ろうとします。
- 5) 定期的に、毎日の勤行のあとに禅定を行います。
- 6) すべての生き物に対する慈心 (metta) をもちます。
- 7) 亡き愛する人に功德を送ります。

タイでは、仏教を守り安定させるために、これらの4つの団体が活発に一緒に活動することが見られます。それは、他のところに見出すことができない仏教の調和と安定性を示しています。

タイの一般の仏教徒は何を信じますか？

普通のタイの仏教徒は、次の上座部仏教の教えを信じています。

1. 他の宗教的な礼拝対象と同様に、三宝（仏、法、僧）を礼拝し信仰します。
2. 本当の生を支配している力として、業の法則を信じます。
3. 他の世界に住んでいる他の生き物の存在を信じます。
4. 個々の業の質に応じて、他の生き物として生まれ変わることを信じます。
5. 無知、昏迷、執着、欲望などの煩悩が、絶え間がない輪廻転生と苦の根源的な原因であって、もし完全な安らぎと幸福が経験できるなら、それらの煩悩は根絶されるべきであるという教義を信じます。
6. 苦の完全な終焉への、正しく確実な方法として、八正道の信じます。

仏教の教えによって形づくられるタイの特色

宗教的なコミュニティのメンバーは、通常、他のコミュニティのメンバーから区別される特徴ある行動をします。その相違は、たいていの場合、その背景に働く宗教的な信仰と実践に求めることができます。仏教徒は死体を重要視しないので、死体は火葬されます。死後に死体は崩壊して、ほこりになります。けれども心は非常に重要です。それは体から生き残って、転生の過程をとります。そのため、生きているものは、死者がより高いもっと良い世界に転生できるように、功德を積んで、死者に功德を送ります。

キリスト教徒と回教徒は、死者が判決の日に死体を復活させるように、彼らの死体を埋葬します。

恐らく、次のことが、仏教の教えによって影響を受けたタイの特徴でしょう

1. すべての現象が無常であるという教えが、次のようなタイの特徴を形づくりました。

1.1. 変化している世界で何にも執着しない傾向。何かへの執着が失望と苦に導くでしょう

1.2. 成功や失敗に関して、その両方ともが一時的であると、それほど本気に考えません。どんな瞬間でも、成功が失敗になることがあります。また逆もまた同様です。生は2つの側の間に前後に揺れ動く時計の振り子のようなものです。それは永久に、一方の側に止ま

りつづけません。同様に、人間の生も2つの側の間を前後に揺れ動きます。望ましいものの側 (富、名誉、称賛、幸福の獲得) と望ましくないものの側 (富、名誉、称賛、幸福の損失)。

1.3. 成功に大喜びも、失敗に大悲しみもしない傾向。タイ人はすべての状況に順応して、受け入れることができます。

2. 苦の教えは、タイの特徴として、次のような影響を与えました。

2.1. 苦しんでいる人々や動物に同情的で、寛大で、親切である傾向。

2.2. 生活のすべての瞬間を幸福にしようとして、苦の気持ちを埋め合わせる傾向。タイの人々は、サヌック (楽しい) が好きで、最も悪い状態でさえも楽しもうとします。

3. 業の法則の教えは、生と運命が自身の手の中にあることを教えます。

あなたは自分自身の業 (カルマ) で、どんな方向にでもあなたの生を導くことができます。あなたが過去にしたことが現在を、あなたが現在にしていることが未来を決定します。このような教義は次のようなタイの特徴を作りました。

3.1. 独立独歩の精神は、極端な場合、社会の法と秩序を無視することにつながります。タイの人々は統制と組織化の問題に関して非常に無頓着です。

3.2. 神のような超自然の力を恐れず、自己中心的な感覚は、時々誰かに悪い行為をさせます。タイの仏教徒は、行為の結果に関して責任があることをいとわないから、彼らは宗教的な規則の厳守にいい加減です。

3.3. 生の好ましくない運命を穏やかに受け入れる傾向。タイ人は、望ましくない状態は過去の良くない業の結果であると言じるので、生の状態を改善する熱意に欠けます。

3.4. 来世で良い状態を得るために、功德を作る傾向。

3.5. 賭け事を思いのままする傾向。我々の生の過程において、結果を生む瞬間を待っている善悪両方の業のエネルギーの要素があると言じます。何かに賭けをすることは、良い業の要素が果を生むために必要な準備をすることを意味します。

4. 輪廻の教えは、人間の生が、生まれる前から死の後へと続く長い過程の一瞬であることを教えます。現在の生は、過去の、そして来るべき将来への数えきれない生のただひとつです。このような考えは、タイの特徴に次のような影響を与えました。

4.1. 生には将来に向かって多くの時間があると感じる傾向があります。そしてこのような感じ方は、急ぐ気持ちをむしばみ、物事を延期しようします。

4.2. 今生は重要ではないと思って、その結果、未来に希望を託す傾向。

4.3. 死が生を終焉ではないので、死をひどく嫌う必要がありません。多くの仏教徒は、死を、新しいホテルに「チェックインするため」、古いホテルから「チェックアウトする」と見なします。そして、その旅行は、最終的に涅槃に行き着くまで続くと考えます。

5. 現在主義 (Nowism) の教えは、仏教徒に、すでに過ぎ去ってしまった過去や、いまだ訪れていない未来に大喜びも深く悲しむこともなく、
「今」、「こ」に注意を払うよう教えます。過去と未来は夢のようです。この
ような時間への態度は次のようなタイの特徴を形成しました。

5.1. 容易に過去を忘れる傾向。過ぎ去ったことに対するセンスの欠
如。

5.2. その日暮しの傾向。あらかじめ計画を立てることについての欠如。

5.3. 将来のために手近にあるものは不確かであると理解する傾向。

今、この時こそが問題なのです。

しかしながら、タイの特徴は、他のこととまったく同じようにダイナミックで、
偶然です。社会的な価値と状態が変化するとき、それらも変わります。科
学、技術、工業化と近代的なライフスタイルの到来によって、前述のタイ
の傾向は、特に都市部で際立って影響を受けて変化しました。しかしなが
ら、田舎では、まだ、これらのタイの特徴を容易に目にすることができます。

上座部仏教と大乘仏教のいくつかの相違点

仏教には、上座部と大乘と呼ばれる2つの主な学派があります。僧伽の分裂は、仏陀の涅槃の直後に始まりましたが、根本分裂は、釈尊の涅槃後の1世紀たってあらわれました。

その根本分裂は、戒律に対する解釈を起因として教団が二つに割れ、さらに法に対する種々の解釈の違いを生みました。仏滅後3世紀には、すでに18の部派が存在しました。

多くの大乘経典があらわれ始めた仏滅後6世紀に、大乘仏教があらわれ始めました。2つの学派の主な相違は次の通りです。

1. 上座部仏教は、仏陀の涅槃のわずか3カ月後に開催された第一結集で、長老の比丘や仏陀と同時代人の会衆によって、集められ、分類され、組織化され、認識されて、記憶された仏陀の教えを維持しているため、そのように名づけられました。

大乘仏教は、阿闍梨師 (Acarya) の説 (Vada) すなわち、「アーチャリヤ・ヴァーダ」と呼ばれます。上座部の論師は、大乘経典が西暦紀元後から5世紀の間に、仏陀が語ったように装って作られたと信じます。

2. 上座部仏教は、大乘教徒によって、上座部仏教が輪廻から個人の解脱を最初に強調するから、「小さい」(Hina) 乗り物「(Yana) すなわち小乗仏教 (Hinayana) と呼ばれました。

「小乗」との名称は、国際仏教徒会議が1949年にスリランカで開かれ、仏教の世界でのその名称の使用が禁止されました。

大乘仏教との名称は、その教えが苦からより多くの人々を助けるために菩薩となろうとするので、大乘教徒自身によってそのように呼ばれています。

3. 上座部仏教は、上座部教徒が声聞の覚りを(阿羅漢果)求めるので、「声聞乗」(Savakayana)と呼ばれます。

大乘仏教は、大乘仏教徒がまず他人を涅槃に至らしめて、その後に自分たちが涅槃に入る菩薩であることを望むので、菩薩乗(Bodhisattvayana)と呼ばれます。

4. 上座部仏教は、インドからアジアの南に広がりました。すなわち、スリランカ、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアのような南の国で現に行われているので、「南伝仏教」「南方仏教」と呼ばれます。

大乘仏教は、モンゴル、チベット、中国、韓国、日本のような北の国で行われているので、「北伝仏教」と呼ばれます。

5. 上座部仏教は仏陀の本当の教え、信じるべき源として三蔵(Tripitaka)を崇め、仏陀より先後世のものとして、大乘経典を退けます。

大乘仏教は、仏陀の正しい教えが他の伝承を通して維持され、伝えられたとして、『般若経』、『法華経』、『華嚴経』などの大乘経典を崇めます。

6. 上座部仏教はその神聖な言語と共通語 (língua franca) としてパーリ語を、すなわち古代インドの言語の方言を、使います。

大乘仏教は、大乘經典のすべてのテキストが中国語や他の言語に翻訳される前に、經典の言語として梵語を使用しました。

7. 上座部仏教は、ゴータマ仏陀がすでに涅槃に入っているにもかかわらず、ゴータマ仏陀を最高の崇拜対象とします。

大乘仏教は、利他 (手助けを必要としている誰にでも手を貸す) のために生きて、世界を歩き回っていると信じられる種々の菩薩 (仏陀となるべきもの) を崇拜して、彼らに祈願します。

8. 上座部仏教は、ゴータマ仏陀が涅槃を達成して、完全にいなくなつたと信じます。仏教徒は、ただ仏教の偉大な歴史的な創設者 師として彼を崇拜するだけです。

大乘仏教は、釈迦牟尼仏は法身と呼ばれる真理を身体としているものを表明したものに過ぎなかったと信じます。

9. 上座部仏教の見解は保守的です。三蔵で具体化される仏陀の教えは究極の真実と見なされます。新しい解釈をする必要がありません。従って、それは、どちらかと言うと統一されていますが、発展性に欠けます。

大乘仏教は非常に進歩的で、教義についても新しい解釈をすることが自由です。新しい解釈を規制する権威を欠いたこの自由主義の態度は、新しい部派の新しい解釈や新しい經典の作成のチャンスを

広げました。その結果、大乘仏教はいまだ発展していて、多様性を
持ち続けています。

10. 上座部仏教は実践的です。上座部仏教は明確で、実際のな道を定め
ました。

大乘仏教は、思索的で、理屈っぽく、哲学的です。大乘仏教は、
仏性、唯識、空などのような抽象的な現実についての抽象的な議論
を好みます。

11. 上座部仏教は漸進的に道を進むことを奨励します。それは、三宝へ
の帰依 (Saddha) にはじまり 悪や害することを避ける戒 (sila) を守り
施 (dana) を行い、慈 (metta) 、悲 (karunā) 、喜 (mudita) 、捨
(upekkha) を伸ばし、禅定 (samadhi) を行い、最後に智慧 (pañña) を
身につけることで終わります。

大乘仏教は、すべての信者に決まった道筋を示していません。誰
でもが、自分の好きなように、また、自分の能力や素質 (根) に応じて、
どんな段階にでも力を注ぐことができます。例えば、浄土教は阿弥陀
仏への信心を強調し、また、禅は直観的な智慧と頓悟を強調します。

12. 上座部の仏教徒の比丘は、およそ 2600 年前に仏陀によって定めら
れる 227 戒を守ろうとします。

大乘の仏教徒の僧侶は多くの戒律を無視して、ただ彼らの社会や
気候に適した実際のな戒律だけを保ちました。

13. ほとんどの上座部の比丘は、肉食主義ではありません。彼らは、次の
3つの条件に従うなら、肉を食べることが許されます。

- 1.比丘は殺すという行為を見ませんでした。
- 2.比丘は殺す音を聞きませんでした。
- 3.比丘は動物が自分のために殺されるとは思いませんでした。

多くの大乘の僧侶は、厳格な菜食主義者です。一般的な戒律のほかに、彼らは、利他の菩薩戒 - 直接的にも間接的にも有情を殺さない - に従わなければなりません。

仏陀はどんな人ですか？

仏陀は、西暦紀元前 6世紀 (年代については、学者によって説が異なる)に、北インドにいた歴史上の人物です。

上座部の伝承によると、彼は西暦紀元前 623 年に生まれて、80 歳の西暦紀元前 543 年に涅槃しました。彼は、ヒマラヤ山脈の麓 (ネパールの一部とインドのウッタラプラデシュの一部)にある「サッカ (Sakka)」と呼ばれる小さい国の「スッドーダナ (Suddhodana)」という名前の王の子でした。彼の名はシッダッタ (Siddhattha : 梵語 Siddhartha - 満たされた望み)で、彼の姓はゴータマです。「仏陀」は「賢明なもの」を意味する普通名詞です。インドで、彼は沙門ゴータマ (Samanā Gotama 禁欲のゴータマ)と、非仏教徒に呼ばれました。仏教徒は彼を世尊あるいは薄伽梵 (Bhagavant)と呼びました。仏陀は自分自身を如来 (Tathagata)と呼びます。大乘教徒は彼を釈迦牟尼あるいは釈迦牟尼仏と呼びます。西洋の学者は彼を仏陀あるいはゴータマ仏陀と呼びます。

カピラヴァットゥ (Kapilavatthu : 梵語 Kapilvastu)はサッカ国の首都で、南に隣接する強力国・コーサラ (Kosala)の王国の宗主領でした。

シッダッタ王子は、ルンビニー園 (Lumbini)の木の下で生まれました。王妃と彼女の従者たちが彼女の両親のいるデーヴァダハ (Devadaha)に向かう途中、このすばらしい事が起こりました。釈迦牟尼の母であるマー

ヤー (Maya) 夫人は、彼の出生の 7 日後に死にました。シッダッタ王子の
カーストはクシャトリア (Ksatriya) に属しました。

他の宗教のどの創設者よりも、仏陀の伝記は彼の出生の瞬間から彼の
死まで奇跡でいっぱいです。彼は、三十二相好を備え、天才的な知性を
身に付けた完璧な人間です。彼は、国の独立を再び得るための力強いリ
ーダーを必要としていた一族の望みでした。彼が一族の望みを果たすよ
うに、彼の父親は、国内で最も良い教師の下で、最良の教育を彼に施し
ました。彼は、王子が持つべき喜びと慰めを与えられました。彼は、非常
に早い時期に、ヤソダラー (Yasodhara) という名前の美しい王女と結婚
していました。

転機

伝承によると、シッダッタ王子は、ある日、二輪馬車で公園に行って、
年を取った男を見たために、宗教的で、哲学的な性向の若者となったに
違いありません。彼は老年の痛ましい光景に強い印象を受けました。彼は
宮殿に戻りました。彼は、公園に 2 度目に行った時、病気の男 (恐らく同じ
年を取った男) を見て、最初の時よりさらにいっそう瞑想的になりました。
公園に 3 番目に行った時、彼は忌まわしい死体を見て、人生に嫌悪感を
強く抱きました。彼は、今のままの生が不完全であり、自分が望むもので
ないことを覚悟始めました。その直後、彼の妻は彼の唯一の息子、ラーフ
ラ (Rahula) を産みました。シッダッタ王子は、この幸せな出来事を喜ぶど

ころか、それを苦しみの徴候として見ました。この生こそが、老・病・死をもたらすと。彼は、もし完全に生老病死のない状態があるならばと、思案しました。彼はこのような状態があるに違いないという結論に到達しました。彼は、今、そのような状態を得る方法を知りたいと思い、それを真剣に望みました。

ある日、彼は再び公園を訪れ、木の下にいる静穏な苦行者の姿を見かけました。彼はその光景に深く感銘を受けて、苦の終焉への方法があるのは確かであると思いました。

彼は、29歳の時、彼の父親の意志と抗議に反して出家し、苦行者となり、苦の終焉の道を探し求めました。

彼は、6年間、当時有名な先生の下で勉強と修行に打ち込みました。彼はどの先生の教えにも満足していませんでした、なぜならその教えを十分によく知っても、まだ苦が続いていたからです。もう彼には、ひとつの方法しか残されていませんでした。その方法は、他の人に相談するのではなく、苦行でした。他に方法もなく、王子は苦行をはじめすることに決めました。古代の本で定められるように、彼は苦行を自分自身に課しました。最後の方法は断食でした。彼は40日間食物なしで生きました。結局、苦行者ゴータマは、それら苦行が最終的な解脱になんら意味がないことに気づき、苦行を止めました。

覚り

苦行を断念した苦行者ゴータマは、トンネルの行き止まりにいるように感じました。彼は、次に何をすべきかを考えている時、たまたま、ある事件を思い出しました。7歳の時、彼は市外で催されている農耕祭に父親に連れられて出かけました。式典の最中、まだ小さい王子はテントの中に一人で残されました。王子は、何もすべきことがなく、自分の呼吸に集中し始めました。彼の心はひとつに向けられて、静まり始めました。それは、彼が以前に決して感じたことのないような素晴らしい経験でした。もし再びその方法を試みたならどうなるか。

苦行者ゴータマは、自分の出入りする呼吸に注意を集中し、すぐに幼年時代の経験を再び体験しました。彼の心は柔和に、柔軟で、そして半透明になりました。苦行者ゴータマは、深い瞑想の最初のステージで、過去に向かって、自分の生を追跡し始めました。すべての出来事がはっきりと彼の心の中にあられました。驚いたことに、彼は、今生だけでなく、何千という生で起こったすべての事を思い出すことができたことに気づきました。

夜、第二更に、苦行者ゴータマは他の人々の生へ心向けました。彼は、ある有情の消失と、それらが他のどこかに再びあられているのを、天眼によって、はっきりと見ました。

苦行者ゴータマは、天眼で見たものから、次の現実を見いだしました。

1. 輪廻の現実と生と死の流転の現実。

2. いろいろな生存状態と宇宙の他の生き物の現実。
3. すべての生き物の生を支配する業の法則。
4. 縁起、因縁の現実。すなわち、生は独立してもなく永遠でもないものの相互依存のプロセスであるという現実。
5. 無我 (Anatta) の現実。

彼自身や他の生きものの生と死の果てしない過程を悟って、苦行者ゴータマの心は、嫌悪の情と冷静さでそれから向きを変えて、最終的に解放されました。彼は、すべての煩悩がきっぱりと追い出された最高の覚りを得ました。それから、彼は心が明(覚りの智慧)、清浄、寂静、大悲によって特徴づけられる仏陀、すなわち覚ったものとなりました。

仏陀の伝道

仏陀は、一切の有情に対する大悲心で、すべての階層とカーストの人々に、彼の宗教的な経験の要約である四諦を説き、北インドを遊行しました。彼の熟練した説法に刺激されて、多くの人々は真実を理解して、同じ覚りを得ました。彼らは比丘となり、適切な訓練と指導の後に、この新しい宗教を普及させるために北のインドのあちこちに派遣されました。仏陀の伝道は非常にうまく行きました。覚りのわずか9カ月後には、仏陀のまわりには、普遍的で平和な彼の教義を広めるために、およそ1250人のすぐれた弟子がいました。

仏陀はどんなものにも教えを書き留めませんでしたし、彼の弟子たちもそうませんでした。数種の文字はすでに使用されてはいましたが、一般の人々は、宗教上の教えはそれが聖なるものであるので、低級で純粹でないと思われるいかなるものにも、それらが書かれるべきでないと、常に信じていました。それらは、人間の心のみで維持されて、保持されるべきです。記憶は宗教的な教えを保持するべき唯一の方法でした。

初期の仏教の場合、記憶能力が優れているとよく知られていた2人の比丘が、仏陀の教えを記憶 維持することになりました。とわけ、仏陀の個人的な付き添い人であるアーナンダ (Ananda) は、仏陀の哲学的、道徳的な教えを記憶する役でした。また、ウパーリ (Upali) は仏陀によって時折定められたすべての律と戒を記憶しました。

仏陀は45年の積極的な伝道後に涅槃しました。教えを伝道し続けるために、彼はよく組織され、よく訓練された比丘の教団、すなわち僧伽をこの世に残しました。